

## 母乳中への抗痙攣剤の移行と授乳に関する研究

(分担研究：新生児・乳児の在宅療法と生活管理をめぐる保健指導に関する研究)

研究協力者 磯部 健一

共同研究者 國方 徹也

**要約**：母乳中への抗痙攣剤の移行を知る目的で抗痙攣剤を内服していた6例の母親の分娩後の血中濃度、母乳中濃度、児の血中濃度の動態を測定した。phenytoin, carbamazepin に関しては母乳栄養を禁止しなくても良いと考えられた。phenobarbital に関しては、児の血中濃度を測定し個々の症例に慎重に対応することが必要と考えられた。

**見出し語**：母乳中薬物移行, 抗痙攣剤, phenobarbital, phenytoin, carbamazepin

**研究方法**：母親が抗痙攣剤を内服している成熟児6例。母親の疾患は1例が脳腫瘍術後の脱力発作、他の5例はてんかんで、内服薬は4例がphenobarbital (PB), 3例がphenytoin (PHT), 1例がcarbamazepin (CBZ) であり、2例は2種類内服していた。PHTとPB内服の2例にApneaを伴うwithdrawal syndromeを認めた。各々の濃度測定には高速液体クロマトグラフィーを用いた。

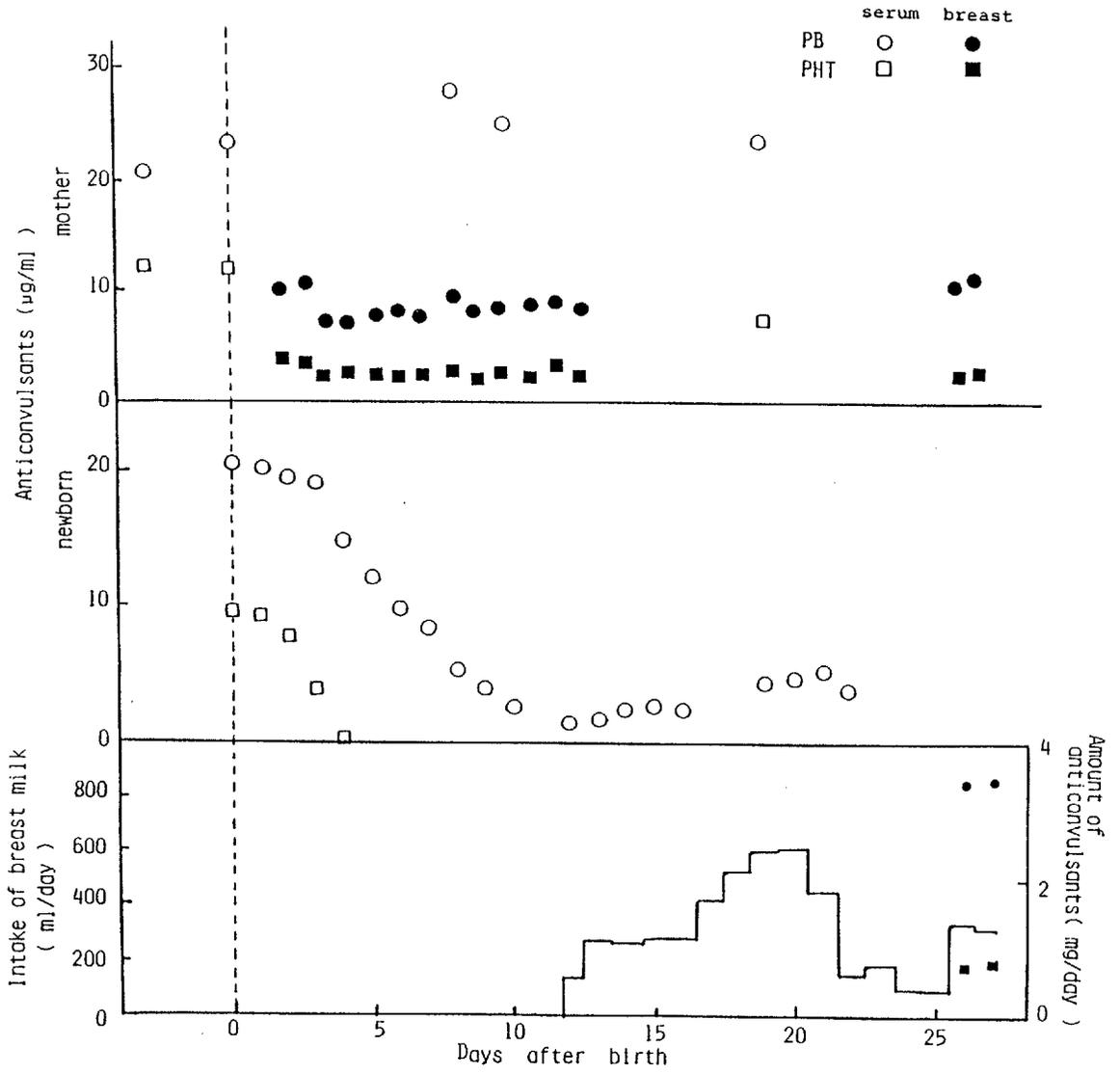
**結果**：PB 180mg, PHT 270mgの1日1回服用例(図1)では、母親の血中PBは21~28  $\mu$ g/mlで、母乳中PBは、7~11  $\mu$ g/ml, PHTは1.7~3.7  $\mu$ g/mlであり、milk/plasma ratioは平均PB 0.32, PHT 0.19であった。出生時の児の血中濃度はPB 20.7, PHT 9.7と高く、半減期はPB 131時間, PHT 53時間であった。PHTは日令5以後検出されなかったが、PBの血中濃度が高い為母乳栄養は日令12にて児の血中濃度が

1.6まで低下した時点より開始した。完全母乳栄養にならなかった為PBの母乳からの児の摂取量は約3.5mg/日だが800ml/日の哺乳と仮定すると8~9mg/日となり、蓄積していく可能性があった。

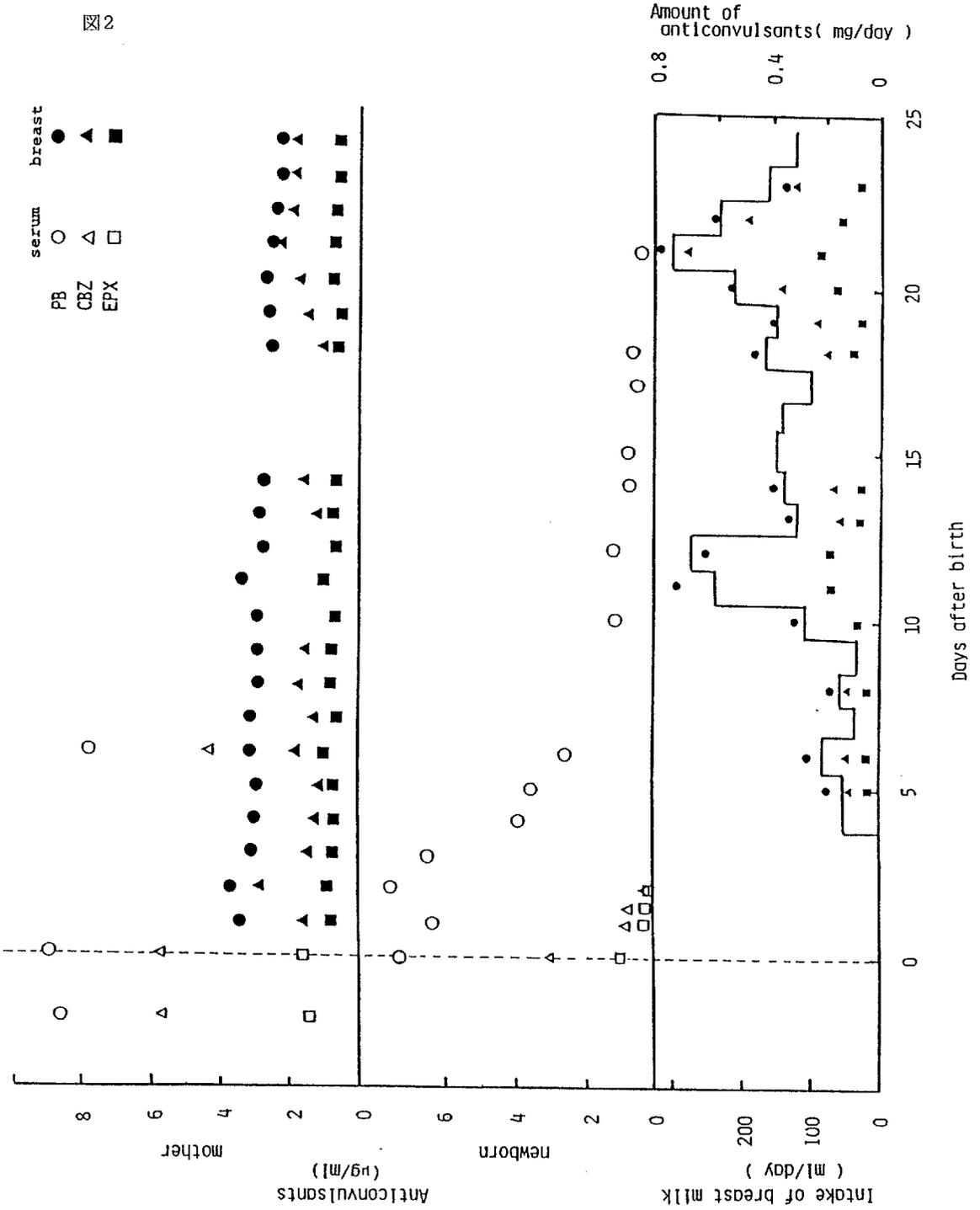
PB 40mg, CBZ 300mgの1日2回投与例(図2)では児の血清中のCBZ, epoxy-CBZは速やかに減少し日令3以後は検出されなかった。日令20で哺乳量700mlと仮定すると、母乳からの児の摂取量はPB 2.5mg, CBZ 1.5mg, Epoxy-CBZ 0.6mgと計算できた。

**考察**：今回の成績によりPHT, CBZに関しては初期からの母乳栄養は禁止しなくても良いと思われた。PBに関しては出生後早期は血中半減期が長く、また母親の内服量が多い場合には出生直後の児の血中濃度も高い為個々の症例に対して慎重に対応することが必要と思われた。

☒ 1



2





## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:母乳中への抗痙攣剤の移行を知る目的で抗痙攣剤を内服していた 6 例の母親の分娩後の血中濃度,母乳中濃度,児の血中濃度の動態を測定した。phenytoin, carbamazepin に関しては母乳栄養を禁止しなくても良いと考えられた。

phenobarbital に関しては、児の血中濃度を測定し個々の症例に慎重に対応することが必要と考えられた。